

故郷

堺の街の妙国寺、

その門前の庖丁屋の

浅葱納簾の間から

光る刃物のかなしさか

御寺の庭の塀の内、

鳥の尾のよにやはらかな

青い芽をふく蘇鉄をば

立つて見上げたかなしさか。

御堂の前の十の墓、

仏蘭西船に斬り入った

重い科ゆゑ死んだ人、

その思出のかなしさか。

いいえ、それではありませぬ。

生まれ故郷に来は来たが、

親のない身は巡礼の

さびしい気持になりました。

掲出歌集

『晶子詩篇全集』昭和4（1929）年

初出 「線と影」「三田文学」明治44（1911）年6月

（晶子33歳）

